

CLOSE-UP
INTERVIEW

プロサッカー指導者

高倉 麻子さんに聞く

「聞き手」川島 葵さん フリーアナウンサー

「自分らしさ」を大切に
自らを磨き
仲間とともに
成長する喜びを感じてほしい

たかくら・あさこ

1968年、東京都生まれ。和光大学文学部卒業。サッカー日本女子代表監督。小学校4年生の時にサッカーを始め、15歳で日本代表に選出され、2度のワールドカップ、アトランタオリンピックに出場。2004年に現役を引退後、FIFAのテクニカル・スタディ・グループやインストラクターとして、大会の分析や指導者の育成に従事。2016年からなでしこジャパン(サッカー日本女子代表)を指揮する。

人生を拓くきっかけは

そばにある何気ないこと

川島 本日は、プロサッカー指導者でサッカー日本女子代表監督の高倉麻子さんにお話を伺います。新型コロナウイルスの影響で、オンラインでつないでの取材となりますが、お会いできることをとても楽しみにしていました。まずは、監督がどのようにしてサッカーと出会ったのかをお聞かせいただけますか。

高倉 私は小さいころから非常に活発な子どもで、遊び相手も男の子ばかりでした。近所に住んでいる仲間とよく野球をしていたのですが、その野球仲間が小学校4年生の時に学校のサッカークラブに入るようになったのです。放課後に遊ぶ仲間がいなくなると、私もサッカークラブに入部届を出したことが、サッカーとの出会いです。

川島 遊び仲間が野球からサッカーへシフトしていったというところが直接のきっかけだったんですね。

高倉 どうしてもサッカーがやりたかったわけではなく、友だちと遊びたいというのが大きな理由だったので、入部届を出した際に、先生に「女の子はダメ」と言われていたら、サッカーに触れることはなかったと思います。

川島 当時の遊び仲間やその時に受け入れてくれた先生がいたからこそ、今の監督があるわけですね。

高倉 サッカーに出会えたことも、好きで続けてこられたことも、当時の仲間や先生があつてこそなので、とても感謝しています。小さなきっかけやめぐりあわせから人生が拓けてきたことは、とても不思議なことです。とにかく、私の場合は「サッカーが好き」というのが、いつも一番にあったのだと思います。

好きなことを続けてこられた 幸せと周囲への感謝と

川島 中学時代には福島と東京を往復してサッカーを続けられていたとか。

高倉 私が中学生だった当時、女子サッカーは、国内リーグ、オリンピックやワールドカップ、アジアの大きな大会などはない時代です。そのため、サッカーをする環境も福島にはなく、私は小学校卒業と同時に、一度サッカーを離れました。東京にはいくつかチームがあると聞いて、サッカーを続けたい思いから、チームに所属させてもらい、福島から東京の練習場まで通っていました。

川島 当時はまだ新幹線も走っていなかったのでは。

高倉 福島から上野まで3時間15分ほどかかっていました。そこからまた練習場まで行くわけです。数時間サッカーの練習をするために、往復6時間以上を費やしていたんです。

川島 大変だなとか辞めたいと思ったことはありませんか。

高倉 ありませんでした。数時間の練習でもボールを蹴ることができるのは、喜びでしたし、チームの先輩たちにもかわいがっていただきました。「楽しい」以外のことは感じていなかったと思います。

川島 ご家族の理解や応援がなければ、続けることは困難でしたよね。

高倉 本当にその通りです。いまのようにサッカー選手になるという道が拓けていないどころか、見えてもいなかった時代に、よく中学生の私を東京まで練習に行かせてくれたなど。

川島 そんな中学時代に日本代表に選出されたわけですが、それはやはり特別なことでしたか。

高倉 その意味や重みに、正直ピンときていませんでした。日本代表が結成されたり、国内リーグがやっと整備され始めたところで、若い選手が多く、サッカー好きの女の子の中で、少し人よりもボールを蹴るのがうまかったり、得意技があ



るような子が代表として選出され、初めての海外遠征に行ったという感じ。今のなでしこジャパンの基礎、土台としての代表ではあったと思います。

川島 とはいえ日本代表ですから、同級生たちに驚かされたわけではないですか。

高倉 代表になったことは、学校には報告していません。というのも、中学ではサッカーをする環境がなかったので、私はバスケットボール部に所属していて、サッカーをやっていることを言い出せずにいたんです。でも、新聞に代表のことが掲載されて、バスケットボール部の顧問の先生が知るところとなりました。この先生はとても厳しい方でしたが、その時「サッカーとバスケットボール、やりたい方どち

らかにしたほうがいい」とおっしゃってくださいました。そこでさらに、サッカーへの道が、確かなものになった気がしています。本当にその時々で、背中を押してくれる出会いがあるものだと感じています。

サッカーとは異なる様々な

出会いがあった大学時代

川島 高校を卒業されるとき選択肢はどのようなものがあつたのでしょうか。

高倉 私は「東京へ出てサッカーをする」と決めていましたが、大学に女子サッカー部があるとか、サッカーで推薦がもらえるというようなことも、そのころはほとんどなく、当時私が所属し



川島 葵さん

ていたチームのグラウンドに近い、和光大学へ進学したのです。

川島 サッカーを続けながらの大学生活では、どんな学びがありましたか。

高倉 本を読むことが好きだったことから、大学は文学部を選びました。とても自由な大学で、学部以外の単位を取ることができたのも面白かったですね。

川島 本がお好きとのことですが、どんな本を読まれるのでしょうか。

高倉 今は、司馬遼太郎さんの『竜馬がゆく』を読んでいます。歴史ものが結構好きで。フラツと図書館に行って子ども向けの歴史の本を読み漁ったり。あとは、心がもやもやしたときには、別次元に行ける感じのする村上春樹さんの小説を読みます。大学を卒業したら雑誌を作る仕事に就きたいとも思っていたので、学生時代雑誌社でアルバイトをしたりもしていました。

川島 サッカー以外の出会いも多かったですか。

高倉 やはり高校までとは異なるタイプの人がたくさんいたので。個性的で面白い仲間も多かったですね。遠征で授業に出席できなかつたときなどは、多くの友人に助けられました。そんな友人とは、今でも連絡を取り合っています。学部学科を超えて授業を履修することができる自由でのびのびとした環境だった

ので、もっと違う分野の勉強もしておけばよかったと思います。

川島 大学3年生の時に日本女子サッカーリーグが発足したわけですが、その時はどのように感じましたか。

高倉 多くの人の努力や協力があつて出来上がった舞台ですが、実際に中にいる選手としては、試合に出られるように頑張ろう、うまくなりたい、強くなりたい、勝ちたいということまでと同じ思いで活動をしていました。

川島 大学3年生4年生ともなると、就職活動などもあり、これからの人生を考える時期ですが、そのころはどのような思いでいらつしやつたのでしょうか。

高倉 第一回の女子サッカーワールドカップが開催されるという知らせもあり、ワールドカップまでは、バイトをしながらでもサッカーを続けたいと思っていました。いろいろ考えましたが、結局サッカーをあきらめるという選択はなかったんだと思います。

世界を知ってはじめて

わかる日本の良さと強み

川島 監督は10代の頃から世界と向き合う機会もあり、これまでもいろいろな国のチームと対戦してこられたと思いますが、世界と戦って感じてきたことはありますか。

高倉 日本代表として初めての海外とのゲームを体験したのは中学3年生の時でした。イタリア代表との試合をベンチから見ているのですが、金髪をなびかせて戦うイタリア人の選手たちが本当に美しく、かつこよく見えました。自分もあんなふうになりたい、追い付きたい、そして追い越したいと強く思いました。

川島 海外と日本のサッカー、その違いはどんなところにあるのでしょうか。

高倉 当時も今もですが、体のサイズとシンブルなスピード、パワーなどのフィジカル面は、やはり圧倒的に日本人には足りていない部分です。ただ、キャリアを重ねていく中で、細かいテクニックや息の合ったプレーや約束事を守るといった集団の強さは、日本人ならではの良さだとわかってきました。

川島 日本人ならではの良さを伸ばして、世界と戦ってきたいわけですね。

高倉 なかなか気づけないことですが、そうした日本人の強みは、世界のサッカー指導者の間でもリスペクトされているんです。他のスポーツでもそうですが、日本のものづくりの細やかな部分の世界を驚かせるように、サッカーでも小回りのきく動きやチームの団結力などは世界でも評価されています。

し、それで十分に戦えて、勝つてもいいけるのです。スポーツを見る際にも、国民性やそれぞれのカラーを比較すると、より深く競技を楽しむことができると思います。日本には日本の良さがあるように、各国にもそれぞれの良さがあります。それぞれがまねでなく、自分の良さ、カラーを認め、それを活かしていくべきなのだとは私は自分の経験から感じています。

好きを突き詰めたからこそ 1ミリの後悔もない

川島 31歳の時に、アメリカのシリコンバレー・レッドデビルズに入団されましたが、この時はどんな思いを持って海外に行かれたのでしょうか。

高倉 今は、科学的根拠に基づいたトレーニングやサポートで、30歳を過ぎても現役で活躍する選手が多くいますが、当時の日本にはまだそういった実績がありませんでした。しかし、自分はまだまだうまくならない、そしてうまくならないという思いもあったのです。私には、何かを選ぶ時、人生の岐路に立った時、「サッカーが好き」という思いと、選手であった時には「うまくならない」という思いがいつも強くありました。何の保証もなくても、好きだしうまくならない

から行ってみようという一念でした。

川島 突き詰めていくと、答えはとてもシンプルだったということですね。

高倉 自分でトライしたことは、誰にも消すことができません。それを積み上げていくことは、自分の財産だと考えています。思い切って挑戦することは、やはり大切なことではないでしょうか。

川島 好きという思いを持ち、36歳まで選手として挑戦し続けてこられたわけですが、引退の時に悔いは残りませんでしたか。

高倉 1ミリの後悔もなく、やり切ったという思いで引退を決めました。私が引退を決めた2004年は、なでしこジャパンがアテネオリンピックの予選に勝った時期で、女子サッカーに少し光が当たりだした年でもありました。若い選手の活躍も目立ち始めていたので、自分がいなくても、日本の女子サッカーはもう大丈夫だなと感じ、サッカーのキャリアは終えるつもりでいました。

自分自身のカラーを大切に それぞれの強みを磨いてほしい

川島 若い選手の育成にも携わっていらっしやいます。指導者

として大切にされているのは、どのようなことでしょうか。

高倉 選手一人ひとりが何を考えているのかを知り、それは大切にしてあげたいですね。こちらからの指示を待つのではなく、自分自身で戦い方を見つけてほしいと思っっています。自分の奥底にある「こうなりたいんだ」という思いをもっと強く出してほしいと感じています。

川島 今の若い選手には、そういった思いを前面に出すのが苦手な人が多いのでしょうか。

高倉 そういう傾向にある気がしています。若い選手はまじめで、よく練習もしているし、指導者の言うことも素直に聞きます。しかし、例えば負けたくないとか悔しいとか、そういった感情を表に出すのが苦手な選手が多いように思います。もっと自分の思いや感情を前面に出してもいいんだよということは練習でもよく言っていますし、鼓舞もしています。

川島 自分の思い、感情を出していくことも、強さや上達につながっていくということでしょうか。

高倉 サッカーはグラウンドに出たら、選手一人ひとりが決断してプレーをしていくという要素が大きいスポーツなので、自分の意思決定を信じなければなりません。もちろん細かなトレーニングを積むことも重要ですが、自分がどん

なふうにいるか、どうなりたいかということをしつかりと肯定していることも、大切な前提だと考えています。

川島 若い選手を見ていく中で、選手がガラッと変わる瞬間や大きく成長する過程を見て、どのようにお感じになりますか。

高倉 急に伸びる選手もいれば、ゆつくりと成長していく選手もいて、それぞれですね。ただ、自分ができるという思いが強すぎる選手は、そこで成長が止まってしまっている気がします。人のせいにしたり、環境のせいにする選手も、同じ傾向にあるような気がします。自分で考え、アドバースに耳を傾け、自分らしい選択をしていける人は、成長し続けることができるのではないのでしょうか。そんな成長に手を差し伸べることも、大人の役割なのだと考えています。

物事をポジティブに捉え 女子サッカーを盛り上げていく

川島 1994年にはアトランタオリンピックに出場されていますが、監督にとってオリンピックとはどのような存在ですか。

高倉 女子サッカーがオリンピックの種目になったという話を聞いた時にも、自分がオリンピック選手になるとは思ってい

ませんでした。ただただ目の前の試合でチャンスをつかみ、それを活かして出場を勝ち取りました。でも、実際にアトランタに行っても、オリンピックにでているという実感は薄かったです。

川島 そうだったんですね。

高倉 日本選手団のジャケットを受け取ったり、横断幕に「アトランタオリンピック」と書いてあるのを見て「ああ、オリンピックなんだ」と感じたくらいでした。ただ、その時の仲間とは、精一杯試合ができたし、応援してくれた人にも楽しんでもらえたので、大きな舞台に立てたことに感謝をしますし、幸せだと思っています。

川島 東京オリンピックは延期になりましたが、そのことについてはどのように感じていらっしゃいますか。

高倉 日本で開催されるということは、日本人の選手が注目される大きなチャンスでもあります。だからこそ、結果を残したいという思いは強くありますね。延期にはなりませんが、若いチームにとって、1年余分に強化できることを、ポジティブに捉えています。

川島 選手たちのモチベーションはいかがですか。

高倉 オリンピックに対して、それぞれの選手が大きなモチベーションを持って練習に励んでいると思います。年齢の高い

選手と若い選手などそれぞれに捉え方は異なると思います。が、引き続き、コンディションを整えて成長していくという意味では、これからの1年も変わらないはず。時間をもらったと思つて、もっと成長しよう、選ばれるように頑張ろうと士気を上げていつてくれたらうれしいですね。

川島 前向きに捉えてさらなる成長を期待したいですね。

高倉 日本のサッカーの良さをもっともっと世界にアピールできるように、選手、指導者ともに磨きをかけていきたいですね。そのためにも、自分自身の色や個性に誇りを持ち、切磋琢磨を続けてほしい。未開発の部分が残されているからこそ、日本の女子サッカーは魅力も多い。そのことをたくさんの人に伝えていきたいと思つています。

川島 今日は女子サッカーの魅力、指導者として人の成長に関わることなどお話をたくさん聞きました。本当にありがとうございました。

